蕗の花咲く

芝木好子

光文社

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思いますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。御職業、年齢などもお書きそえください ませんか。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

昭和三十四年十一月二十日 印刷
昭和三十四年十一月二十五日 初版発行

定価二八〇円

薔薇の木にバラの花咲く

著者 芝木好子
東京都杉並区馬橋四ノ四四六

発行者 神吉晴夫

印刷者 盛英信

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区関口町一四〇

発行所 株式会社 光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(94)一一〇〇—九
振替東京一一五三四七

(関川製本)

乱丁、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

© Yosiko Sibaki 1959

目

次

家庭教師……七
姉妹……三
鏡の人……毛
ドライブ……五三
暗い影……六
朝靄の中……八五
高原の宴……一〇〇
新しい朝……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

悪日……一三〇
尾行者……一四八
うそと真実……一六一
微笑……一七六
愛の倫理……一九一
旅への誘い……二〇六
季節の訪れ……二二二

装・丁　町　春　草

長編小説

薔薇(ばら)の木にバラの花咲く

家庭教師

午前八時のお茶の水駅は、国電が、着くごとに学生を吐き出すので、橋下に横たわったホームから階段をのぼった改札口まで溢れるように学生服がつづいて、なにか魚類の大群が川をのぼるさまを連想させた。

矢野黎子は駅の前からお茶の水橋にかけて二三歩行って橋桁によりかかり、この大群が駅から四散してそれぞれの教室へ急ぐのを眺めていた。こんなにたくさんの学生が各自の目的や生活をもって急ぎ足になっている姿勢が、彼女には自分の背中をみるような親しさと味気なさで眺められた。この食傷しそうな学生服の中から彼女は鳴海一がくるのを待たなければならなかったが、待つのが厭ではなかった。鳴海とは一週に一二度しか一緒になる日がないので、むしろこうして待っているのがたのしかった。

橋の上からみると底深い川は濁っていて、神田上水からきて隅田川にそそぐ川筋にしては流れが乏しく、動いているともみえなかったが、ちょうど小さな荷舟が現われて一人の男が舵をとり、ゆるく川を下ってゆくのが見えた。一方は駅の歩廊で、他の一方は崖で、崖上は電車通りであった。崖は傾斜になっていて、みどりを敷いた風致地区になっていたが、以前は有名なバタヤ部落のあったところだった。黎子がぼんやりこの崖を突きぬけて、川を横切ってゆく地下鉄の鉄橋を眺めていると、肩に人のふれる

気配がした。大学院へ通っているのにまだ学生服を着た鳴海一が、いつもの落着いた少しもこせこせしない動作でよってきていたのだった。

「おはよう。」

と彼は言って、真直に黎子を見た。人と待合わせをしてめったに相手より早くきたことのない彼は、授業にも遅刻の名人でいろんな逸話がある。ある若い几帳面な英文学の教師が授業の初めにざわざわと教室へはいってくる学生を叱って、講義開始の十分以後にくる学生は入れないと宣言した。その最中に鳴海一が悠々とはいってきて教室の最前列の席にかけると、教師はちょっと口をつぐんだあと、

「彼だけは別です。」

と言ったというのである。真偽のほどはわからないが、黎子は鳴海らしいとおかしかった。

「十分待ったわ。」

「今、なにを見ていたの。」

歩きだすと鳴海は橋の下へ目をやった。崖のみどりにはつつじが多くて、そろそろ薄紫の花卉が開きはじめていた。よくこの川を通る泥舟はもう見えなくなっていたが、振向いた鳴海は濃い眉の下にいささかの感慨をこめた表情になっていた。

「僕の叔母はこの上の湯島に住んでいて、空襲のときこのあたりまで逃げてきたそうだ。この橋の下に防空壕が幾つもあったらしいけど。」

「その防空壕あとにバタヤ部落が住みついたのじゃない。」

「そうかもしれない、お水端だし。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

鳴海の叔母は空襲の明け方、一人娘とこの辺りまで逃げてきて、防空壕へ避難するために崖の小径を転がり落ちていった。初めの壕はすでに避難民で一杯で入れてくれない。橋下の奥へもぐっていって、次の壕を探し出すとそこも満員になっていた。そのとき妻を連れた軍人が近づいてきて、彼は遮二無二妻と鳴海の叔母たち親子を押しこみ、どこから運んできたのかトタン板で壕の口を塞いで石を積み上げた。彼はそれから軍務に服するために出かけたとみえて、壕の前を去ったらしいが、無事にあの空爆の真下から逃れきったかどうかわからない。波状爆撃が終わって、死の恐怖にさらされた一夜が明けてみると、無事に爆風から逃れたのはトタンでおおったその防空壕だけだったというのである。

「あの場合の生死は奇跡みたいなものだね。」

鳴海は言って、同じ場所がいまはきれいな眺めになって明け暮れ人が歩廊に立ってたのしむ風景にかわっていることを語りながら黎子を見たが、彼は不意に息をつめた。黎子のうつむいた細い項が白ちゃけて、ぼんやり沈んだ表情がかげってみえたからだった。彼は黎子がやはり戦災にあって不幸な一夜でことごとく肉親を失った人間だということに、思いあたった。そうだった、失敗ったことをしゃべったと鳴海は気づくと、彼は急に詫びの言葉も出なかった。まったく、不用意に他人の傷にふれてしまったのだ。いつもは明かるい爽やかな矢野黎子が、そうしたなにか過去に関したことで暗い記憶につきあたったり、生活に思いあぐねたりした時、彼女は急に立木がしおれるようにその表情から光りを失うのが常だった。いままで生き生きしていた勝気な二十二歳の女子学生が、ふいに暗く閉ざされると陽が翳るよりも陰気な侘しい脱落者のおもかげが宿るのだった。彼女の上にごくたまにその陰影がかかるのを鳴海は知っていた。

「僕、つまらないことしゃべってごめん。」
彼は順天堂病院の横を通って本郷へゆく舗道を歩きながら、おだやかに詫びていた。黎子はそれには応えなかったが、気を取り直したのか顔をあげて歩いていた。彼女が昭和二十年三月のある夜に火焔につつまれて逃げ迷ったのは東京下町の亀戸あたりであったが、まだ十歳にも充たなかった黎子はその夜の怖ろしさを思い出すだけで、幾年となく脅えたものだった。その日の記憶をいまなら淡々と人に話すことができるかもしれないと思っていたが、黎子はその思い出が今でも暗いのに自分で気づいておどろくほどだった。
「新しい仕事はどうだった。」
と鳴海は気をかえてたずねた。
「それが、今日、先方へお目見得なの。」
「よかったね。」
「まだわからないけど、条件はすごくいいの。」
アルバイトに家庭教師の口はもっとも好適で、学生は大半持っているが、黎子はちょっととぎれていた。その間、役所のカード整理に臨時に傭われたり、玩具工場へ行ったりしていたのだから、今度の口は感謝ものだった。今日の午後、彼女は同級の秋山亮につれられて、先方の家へ挨拶にゆくことになっていた。
「秋山の世話だと仲介料をとられそうだ。」
「図星よ、月謝の二割よこせって言われてるの。」

「高いな。」
しかし秋山のような学生がいることは彼らにとって便利な存在だった。秋山は家庭も良いし、おそろしく顔が利くので、なにかと有利な話をもってきてくれる。駅から大学まで直通のバスは十円足らずだが、それさえ節約して歩いている二人にとって、条件のよいアルバイトは生活の糧に直結した。先方は成城に家のある、ある会社の重役の家庭で、黎子の教えるのは高校へ進学する少女であるらしかった。鳴海は黎子のためによかったと思った。そのくせ彼は黎子の生活に立入ったことはなかったが、いつも誰の世話にもならずに、きちんと暮らしている彼女の細い繊やかな身体や緊った輪郭の少し冷たい眼差しや、感情の起伏のたびに浮かぶ表情の変化などに、ときどき不安を感じていた。彼はなにということもなしに、この三年来の友だちのなかに、隠された不幸な部分があるように思えてならないのだが、それは単に孤児だという彼女の境遇からくる先入観かもしれなかった。
「金持の少女は教えるのに骨が折れるらしいな。」
「そう、私は初めてなの。前の子供は牛乳屋の女の子で、よく勉強してくれたけど。」
「子供のなかには親の影響で家庭教師をバカにするのがいる。そういう子はものにならないね。」
「女の子でも、女の教師だといくらか頼りなさを感じるらしいわ。だから、私は甘やかさないことにしたの。」
「そこがむずかしいね、相互の信頼みたいなものが生まれてくれば、あとは自由にやるのさ。」
大学の構内は新芽の季節で銀杏並木にも初々しさがあった。紺のスカートに白い七分袖のブラウスを着た黎子は並んで歩く鳴海とそんなに背丈が変わらなくて、そのわりに小ぶりな顔はお白粉気がないせ

いか白いというより仄かに蒼みをおびた陶器のような肌理のこまかさだった。彼女はもし自分が化粧をすれば姉の銀子のような貌になるだろう、と思っただけで口紅を引く気にもならなかった。

その日の午前の講義は、東南アジアを視察して帰ったばかりの教授の話で、インドにおけるイギリスの植民地政策の名残りが今なおどんな影響をもっているか、ということに始まって、いつか風物の漫談に移っていた。音に名高いタジマハールは大理石で造られたドームの廟だが、それはインドのムガール皇帝が妃タジマハールの死を悼んで建てたもので、二十年を要したものだけに、その情趣極まりない華麗さは目をあざむくばかりだと語られた。

「日本の作家の小説に、確か美しい女主人公の名を田島ハルとつけたのがありました。」

と教授が言うと、学生たちは、ちょっと笑った。愛妃の亡骸のために三千万ルピーの巨費を投じて、まさに傾国の城となった白く輝く城郭の面影は、一とき学生たちをのどかに酔わせた。黎子はこの浮世離れのした教室にいるとき、いつも平安を感じた。もうあと一年たらずのうちにこの教室を去ってゆくということが、彼女にはつまらなくて、学窓を出たあとの期待に充ちた未来などは考えられなかった。

その日の午後はゼミナールがあって、それがすむと黎子は鳴海一と連れ立って教室を出た。今日の約束で藤堂家へ連れていってくれるはずの秋山亮が教室へ出てきていなかったので、黎子はどうしたものかと思ったが、いざとなれば一人でゆくより仕方がなかった。鳴海は秋山のことだから来ないはずはあるまいと言いながら、顔見知りの学生の誰彼に秋山を見なかったかとたずねて歩いた。二人が図書館をまわって校門の方へ歩いてゆくと、向こうから小肥りの秋山亮が、あたふたとやってくるのだった。

「わるい、わるい。」

と彼は重い靴を引きずるような歯切れの悪い靴音で近寄ってきた。彼の血色のよいさくら色の額には、汗が滲んでいた。
「どうしたの、今頃。」
鳴海は咎めるでもなくたずねた。
「やあ、すまん、今朝たしかに校門の前までは来たのに、よけいな男に会ったのが運のつきで、中国語のゼミナールの教室へ行ってしまった。」
「ああ分かってよ、麻雀でしょ。」
秋山は否とも言わずにやにやしながら、二人について、元きた校門の方へ引きかえした。
「呑気ね、大学の前までできていて。」
黎子は軽く非難してみせた。秋山はいさぎよく自分を投げだした恰好で、
「今月から僕は絶対に自分からはジャン屋へ行かないことを誓ったのさ。それは履行してますよ。ところが悪い奴がいて僕をみると誘うんだ。僕は誘われると全然弱いから、どうしても拒むことができなくなって行ってしまう。しかし決して自分の意志で行くわけではない。」
「同じじゃない。」
黎子はあきれた。秋山は真剣な表情で否定しながら、
「分からないのかな、僕がそこへ行くのは命令があるからです。僕はやむなくそれに従ってしまう。」
と釈明したが、黎子は詭弁だとつっぱねた。二人が押問答をしているのを、鳴海はおだやかに眺めていたが、バスの停留所にくると彼は立ちどまった。彼はこれから自分のアルバイト先へ行かなければなら

ない時間だった。
「今日の先方の様子を聞きたいな。」
と彼は言い、黎子はきっと知らせると約束した。彼が折よく来たバスに乗っていってしまうと、黎子と秋山は並んで歩きだした。
「鳴海さんはひどく矢野さんの家庭教師の口を心配していた。時に、お二人の関係は？」
「友人です。」
黎子はあらたまって小首を曲げて秋山に挨拶してみせた。

成城の藤堂家は駅から七八分ある奥まった閑寂な住宅のつづく一画にあった。石門から前庭をはいると古びてはいるが堂々とした洋館で、ちょっとした城館を思わせた。外観は高く厚い石の壁で築かれているが、中庭に円い曲線の建物がはみ出してみえて、奥深い感じの邸だった。黎子はほとんど初めてふれる宏壮な邸宅に威圧を覚えて、秋山を振りかえった。自動車会社の重役の家とは聞いていたが、彼女はこんなブルジョアの家を考えてはいなかった。こんな家に住んでいる人間や、その子供はどんな精神状態になるのだろうかと考えると、彼女は気が重くなって、足がためらった。秋山亮はそんな彼女に頓着なしに、さっさと砂利を踏んで玄関の扉に近づくと呼鈴を押した。ここへくると秋山は見違えるほど場馴れがして、頼もしく見えた。
二人は女中に案内されて広々した客間に通された。暖炉を中心に二組の客が迎えられる椅子が配置された部屋で、次の間はリビングらしく、その両方から突出した日光室が、円い曲線を描いているのだっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.